

7/6

第11章 災害の公共性 コメント

この章の中で私が注目した点は、言記念碑を馬車前に建てたというところ
です。この言記念碑を昭和8年を津波碑と同じ場所に作るのではなく
より多くの人に見てもらうために馬車前に建てたことを初めに言及したとき
はとてを思い知らされたと思いましたが、馬車を「人の出会いと別れの象徴」と
とらえることはすごく胸打たれました。そう言われて初めて実感
し、意識するものが普段、通学通勤で馬車を利用する人のうち、どれだけの
人がそんなことを意識しているのかと訝るほどおそろくあまりしていな
いと思う。また、このことについての私自身の意見としては馬車と
いう、ものすごく日常の一部となっていた場所に言記念碑を建てよう
とすると言記念碑までもが日常の一部、みんなが見慣れたもので、(西直が「F」
としまりのではないか)と見えます。なので「私は少し日常から少し離れ
たところで言記念碑を建て、その人々が「わびわび」足を運ぶことで
特別なものとして、しっかりと言記念碑に意識してこい」が「き」だと思います。

被災地が注目され、ボランティアが多く駆けつけるのは震災直後だけであるが、実際は震災に伴う問題は長期に渡って段階的に出てくるもので、被災者にとっては震災を生き抜いてもそれからが困難との戦いとも言える。また被災者にとって、現実を知らないボランティアに、支援を必要とするかわいそうな人と見られるのは不快でもある。そのような状況で、人類学はその調査方法によって、長期的に、現実の状況を、被災者の土俵に立って被災地の復興を促進することができる。長期的な調査によってしか気づけない深刻で重要な問題があるので、人類学はそのような問題に気づくという重要な役割も持っている。また、調査し記録して後世の役に立てるということもできる。私達個人がボランティアをするときにも、長期的に被災者の側に立つという姿勢が必要である。

地震など被災を蒙った被災地において、人類学はその場の状況などを把握し、それを報告する。これによりその後の復興の見通しを立てたり、援助や援助を効果的に行うことが出来る。しかしながら、現地へ行って調査だけをして帰るだけでは、現地の人々に対する理解は乏しいであろう。評価を得ることが人類学にとって大切なことではないが、地域とのコミュニケーションを確立し、その上で人類学において必要なことである。本にもあるように、「今どきのこと」もまた調査を行う。これはよい。現地とのコミュニケーション形成により、より正確に状況を理解するということも出来るだろう。また、人類学において、実際の人々のおかれている状況が重要であるということも重要である。例えばコミュニケーション形成は必須なのである。さらにその生活なども体験しなくては必要である。人類学者は被災地において、外から「今どきのこと」を押し付ける人間であり、内側からの被害者の両者の立場にいたってはならないと私は考へる。そして内側にいながら、援助というより社会に貢献していくことも必要である。自分の調査したことを、被災した人々へと伝える。ということも重要である。

第 11 章

災害と公共性

この章を通じて人類学が災害を復興に貢献できるということを知らなかった私が悟られた。災害を支援している人々は可視なボランティアだけではなく、不可視な研究者の存在でもある。災害地での支援行動は自治会の協働は欠かれないが、彼らは具体的に何をすればいいのか、ぎっちりわかっている人は全員だとは言えない。これは、日本を限ったことではなく、ベトナムもそうである。ただし、日本のように研究者からの支援のもらえるかどうか、ベトナム人の私にもわからない。

ベトナムでよく発生してる災害は最悪でも洪水ほど超えないものだが、支援行動の効果があまり見えない。もしくは、日本のような震災がおきれば支援行動はどうか、人類研究者の支援がもらえるかと疑問している。

水害においては、いわゆる専門的技術を持つ人々をボランティアとして現地に
に行けば済むことは多くあるが、地震においては震災が起きた直後に現地
に向かっても、特に今回の熊本地震においては余震が続いており、家屋に
手をつけることができない、済むことは極めて限られてくる。その場合は
短期的なボランティアではなく、長期的に継続的に関わってくれる、人類学者は
被災者にとっては有り難い存在だと思ふ。

これは外部の人である人類学者が関わることにより、現地の人にとって意味があるもの
が不可視化された。外部の人の視点により創られた、もしくは再び創られた
ものが神話化された。つまり、長期的に関わり続けてくれる外部の人
がいなければ住民同士の意見のぶつかりあつたり、解釈の違つたりで復興は進まな
かと思ふが、そこに関わる人は目には見えぬ、住民にとっては被災者たちの思い、
被災地の歴史に注視していることが求められるのではないかと。

28. 7. 13

災害の公共性

公共圏に関わろうとする研究者は、インターネットや関連するアクトから「具体的な成果」を求められる。またそうできなければ現地住民との信頼関係を構築することが困難になる。

筆者は人類学者にもできることとして長期的な関与に基づく聞き取りと記録を挙げているが、そこに至るまでの信用はいかに得られたのか。

あるいは、観察・記録すること自体住民にとって成果と認識されていたのか。

今回 東日本大震災で大きな被害を受けた岩手県に対して、
筆者が「インターネットとこの公共人類学」という主張の元で、
被災者の生活を豊かにするべく活動したように、災害からの復興
災害からの復興という点以外で公共人類学が人の生活を豊かにする
人の生活を豊かにすることに役立っている例があるのか気になった。
例えば高齢者が多く暮らす地区や子育て世代が多い地区などでも、
公共人類学の考えを活かせる点があるのではないだろうか。

「災害の公共性」について

多発する自然災害の日本では、災害への長期的対応に及ぼす影響は大事な問題であり、人類学者にとっても災害が重要なテーマであることは認識されている。災害直後に起きたことの受け止め方も異なっているし、人々の体験もそれぞれなので、災害はどう人間の生活に影響するか、社会や文化の防災力を高めるためのふさわしい対策とは何かまた災害に強い文化を構築するために人類学学に何か求められているか、著者が指摘する問題である。

「災害の公共性」については私が気になったこと：

- ・「災害の公共性」について著者がいろいろ述べたが、「日本文化人類学」とは何かもっと知りたい。
- ・災害に対して成果の活用はどのように可能性なのかまたその活用成果をどう広く学会や社会に調子や還元するべきか。
- ・災害直後の安全やリスク管理の視点からの社会構造や原因究明・迅速処理量を測るための特別法およびその特別法の制定などの問題に対して、災害に向き合う人類学には何ができるか。
- ・最後に、被害者や遺族への長期的対応に寄り添う社会という社会的共感や社会的公共性の視点から考えてみたら、「災害の公共性」を被害者や遺族の問題として個人化がどの程度までできるか。

災害の復旧、復興の際に、人類学が
どのように関与していくか理解できた。

災害が起きた後の復興が意味あるものが

何なのかと疑問を持つ。つまり、出来るだけ以前（災害前）
の状況にある、元通りになることが復興なのか
新しく作り直すことが復興なのかということである。

具体的には、漁業に従事していた人が、災害による

漁港や船が損害したため、沿岸地域の再開発が進み

そこのサービス業をやりわいにするようになり、元の漁師としての生活は失うという
言い換えると、災害という出来事が原因として都市や町が
新しい事柄
がある。

急に変化してしまいそこで新たに社会が出来ることが復興に

なるのが、これは、人の立場によって大きく変化するのは感じる。

という疑問が、自身は、

新しい町、社会の

復興において、アワードによって、目指される形が違ってくるものだろう。

自治体は町の発展、住民は元の生活というような違いがある。

このような主体間での差違をなるべく埋めていくという点で

人類学は重要な役割を果たすのではないだろうか。

被災地への関与をどの時期から行うのかということに疑問を持った。被災直後に、よそ者である人類学者を受け入れる余裕は被災地にはない。当然ながら被災直後に必要なのは、記録を残すために調査しに来る人よりも、物資の運搬や瓦礫撤去などのために動くことができる人である。しかし、被災から数年経ってからでは被災地の状況は刻一刻と変化しており、調査や関与が後手になる。また、本文中で紹介された被災地での取り組みは、人類学者だからこそできる、といえるものではないとされていた。震災後の住宅地の区画整理について、都市計画者や建設業者が主導する場合がほとんどであると思われるが、「この区画に住みたい」という住民の意見が反映されたとしても、その結果コミュニティがどう変化するのかということは考慮されず、区画整理後にコミュニティ内の住民同士の関わりが希薄になるという場合がある。ここに人類学者が関与することはできないか。ハード面に関わって問題を見出し提起するのではなく、ハード面の復興で見落とされてしまう住民自身の声やコミュニティを維持するために必要と思われることを、行政などハード面を担う側に伝え、反映させる役割は人類学者だからこそ担うことができるのではないか。

また、人類学者が被災地で調査などを行う目的は、被災地の動きを記録して後にそれを当事者でない大多数の人々に伝え、記憶として残すことなのか、それとも被災地の復興の過程に関与することなのだろうか。人類学者はどのような視点で被災地に入るのか、被災者をどのような視点から見ているのか、さらにボランティアとして現地に入る人類学者の視点と目的はどのようなものなのかということも疑問に感じる。目的が前者であれば、それは震災の風化を食い止めるための取り組みに繋がる。しかし、風化させてはならないということはメディアなどを通して耳にすることが多いが、そもそも当事者でない人々も含め、社会全体でなぜ震災を風化させてはならないのか、当事者でない人々に震災の記憶を伝える理由はあまり考えられていない。限定された地域で起こる災害を社会全体で捉えて対処するという点に着目して、公共の問題として災害を考えていきたい。

筆者の経験として例に挙がっている。大船渡のまちづくりへの公共人類学への試みは、少なからず、その地域へとプラスになったとは言えるだろう。

しかしながら、人類学者が地域に貢献する必要条件として、都市計画研究者たちの先導が存在するのはないだろうか。都市研究者らがまちづくりを計画し、順調にそれを遂行させたことで、人類学者らは自らの持つ、フィールドワークの能力や、資料分析力を発揮するのは、ないだろうか。

この筆者が関わった地区では、うまくまちづくりが進んだが、歴史的に昔から対立が存在する地域において、区画再編などにより、共に計画をすすめる必要性が生じたときにおいても、同様なことが出来るのだろうか。最後の部分で、筆者は人類学はふだん見えな部分に焦点を当て、光を灯すことも役割のひとつであると述べていたが、そのことが逆に、新たな反発を生み出したり、既存の対立を刺激することにもつながる可能性もあるのではないだろうか。

第11章 災害の公共性

- 。災害、特に地震の被害は広範に及ぶために公共性の高い話題である。その分大衆からも注目を受けやすい。多くの人々が被災者に対し、同情的であり、共感性も高い。そのために学者の調査が少しでも間違えば、もしくは少しでも世間の認識から外れるものならば、バッシングを受けることは避けられまいだろう。

ある意味特殊なほかの公共人類学の課題と比べ、人々の共感性が高いために、人々の被災者と自分自身を同一視した問題認識がされやすいと思う。

- 。被災者というのは本質化されやすい存在だと思う。「被災者＝かわいそうな善良な市民」というレッテルが貼られ、彼らへの支援は合理化されるのである。そのような認識が被災者とひとくりにした支援により、彼らの心をすり減らすのではないか。以前、被災者がテレビの生放送において撮映を妨害し、バッシングを受ける様子を見た。非被災者にとって、自分たちの求める振子まいをしない被災者というのは悪いのである。

被災地が注目され、ボランティアが多く駆けつけるのは震災直後だけであるが、実際は震災に伴う問題は長期に渡って段階的に出てくるもので、被災者にとっては震災を生き抜いてもそれからが困難との戦いとも言える。また被災者にとって、現実を知らないボランティアに、支援を必要とするかわいそうな人と見られるのは不快でもある。そのような状況で、人類学はその調査方法によって、長期的に、現実の状況を、被災者の土俵に立って被災地の復興を促進することができる。長期的な調査によってしか気づけない深刻で重要な問題があるので、人類学はそのような問題に気づくという重要な役割も持っている。また、調査し記録して後世の役に立てるということもできる。私達個人がボランティアをするときにも、長期的に被災者の側に立つという姿勢が必要である。また、被災者になることはできないので、被災者の困難を正確に知ることはできないと悩むことも出てくるだろう。しかし、外部にいるからこそできることを長期的に関わる中でしていき、震災後の新たな公共圏をつくる一つの手助けとなればよい。

「災害」をよんで

災害と公共人類学がいかにしてつながり、また災害関する関係者にいかに関与するのかという漠とした疑問にあったが、その答えとして、スローであることを逆手に取り、関与し続けることをむしろユニークや価値としている。とある。確かに、テレビや新聞などのマスメディアはその性質上、他の情報への転換が早い。そこで公共人類学は、具体的な記述を通して、世間で流通する分かり易い図式では見えてこない複雑な現場のあり方や問題の構成を浮かびあがらせる。具体的には、地区の人々と復興委員会の考え方の違いを理解しつつ、お互いの考えが反映されるように、復興を進めていくことや人類学しかできないことではなく、人類学でもできることといった謙遜のような形が取れることを述べているが、人類学という後からの追跡とそれと対照的な都市計画研究者との連携をとることが全体としての利益になると思われる。

災害においては復興のプロセスに甚大な時間がかかります。阪神淡路大震災では、この復旧は比較的早かったようですが、東日本では5年以上経った今でも、津波跡地が更地の状態であたりします。また、おぼろげに、復興と一口に言っても地域ごとに人間関係は様々で、行政との摩擦も常に起きます。どこかの街だけが他と違うことをするのは平等性の観点からわかりませんが簡単には許可が下りません。そして当然ですが被災者と呼ばれる人たちも疲れてきます。

筆者が「ニヤンスのある光」と表現していましたが、人類学者がこの復興のプロセスに腰を据えて光を与之続ける粘りの姿勢が重要だと感じました。またそこで感じたり見聞したこと記録し出版することから、併せて後の世代に、次の災害時に役立つと思います。

11. 楽音の公益性

楽音の「復興」この言葉について、自分はあまりにも
長く存続するまでにはなかったであろう。特に他電機王の
復興は人の音響の基盤にこそ深く関わるとしてはな
らば、「音が求められ、水道、電線、鉄道などではなかった。
またその復興を担う公的機関(コソ)から、解雇者(コソ)
への負担と感情の不和、伝達も結局ではな。

自分は本年の所費(コソ)あがりからして、11月、コソ
の「復興」に関わる「公的責任担当」を解雇者として
この例において「コソ」に「コソ」の「復興」に
コソにコソが自分の責任の「構造と計画」のコソが
いかにコソ、然れども文芸復興を導く者は、楽音時に直接的に
復興に関与するコソは稀し。しかし11月、コソの
例のように、解雇者をコソに「担当」の「計画」に
コソの「担当」の「コソ」は、コソ「コソ」の「コソ」の
「コソ」に「コソ」に「コソ」に「コソ」に「コソ」に
コソにコソ、達成への努力がみえる気がする。

・P173において被害が生み出される背景を明らかにして次の災害に備える役目を人類学が行うというようなことが書かれてあったが、それはもともと違う分野の領域だと思っていたので具体的な事例を知りたい。

・P174-177は10年以上に及ぶ長期活動と書いてあったが、P174-177の終了時期の目安とはあるのだろうか。

・災害が起きて復旧・復興を行うとき、人類学者が「できること」があるのか疑問に思った。具体的な事例に挙がっているように、まちづくりのために住民の意見を吸いあげたり、話し合う機会を提供したりするのは都市計画研究者達であり、筆者は外部の人間でもあり（まことに貢献できたことが述べられている）。

・画一的な生活インフラの整備とは異なる別の「公共インフラ」 (P.182) とはどういうことか。

- 本章の後半で、記念碑が地域の関係性を二つ二つに高んだかたらずに可視化可能とヒに不可視化可能とありましたが、これは記念碑というものの性格上不可避だと思います。何と語つ伝えかへの基準は状況によると思いますが、災害の記憶の場合、お金のことを言うのでしょうか？ 不可視化されやうい弱者を可視化するために、人類学は継続的に調査するに貢献してほしいと思います。記念碑だけでなく災害の復興過程でも経済の論理が前面に出がうかと思ひますが、人類学はとれにとりやがずに復興を進めるヒントを与えたいです。
- 181ページに関する質問ですが、馬前に置かれた記念碑が遺族の思いを不可視化するのではなからぬか気になりました。
- まちづくりのところで、災害のあとに余裕があまりない住民たちの議論をサポートする研究者や専門家の存在は重要だと思います。住民たちの視野の狭さをわいてきてほしいと思います。
- 筆者は「消極的な関わり方」も悪くはないと述べていますが、その通りだと思います。余計な介入をしようとする悪影響を与ほると思ひます。介入の基準はどう判断すればよいのか気になりました。

いったい、可視化ということの木村にとってどういう
意味がありましようか。最初は、多類派の特権に限ら
れた視角上見えられないうようになってしまった多類派
の問題を見せることだろうと思いましたが、第3節末
で木村が書くように隠されるものの逆として意思的に
公共されるものしがないのでありそうですね。

1576623C

三浦伊吹

想定の通り

通に不備なところから見て、本稿の原稿は、

昭和10年5月10日付の原稿と推定される。

昭和10年5月10日付の原稿と推定される。

昭和10年5月10日付の原稿と推定される。

昭和10年5月10日付の原稿と推定される。

昭和10年5月10日付の原稿と推定される。

昭和10年5月10日付の原稿と推定される。

昭和10年5月10日付の原稿と推定される。

昭和10年5月10日付の原稿と推定される。

昭和10年5月10日付の原稿と推定される。

昭和10年5月10日付の原稿と推定される。

昭和10年5月10日付の原稿と推定される。

災害の公共性

J. E. コックの著書に「強い光」と「ソフト・フォーカス」という
一見すると対立的だが、実際は相互補完的でないX-3”とあるが、
どのように相互補完的なのか。

民族学コメントシート

災害の公共性

ボランティアと聞けば、「非被災者が被災地へ赴いて行う活動」というイメージがどうしても一番最初に想起されてしまう。「被災者が被災地で行う活動」の中にもボランティアは存在するのだ。本節を通して私は初めてそのことを知った。私のこのような発想も、多くの”目に見えないボランティア”を生んでしまうのだろう。いや、私のこの発想のせいで”確かに存在するはずのボランティア”が”見えなくなっている”と言うべきなのかもしれない。

災害の公共性。

前回間違えて「開設」を出したのを今日こつと書き直す。

○ 前回の授業でプロジェクトX を見て、先生が「災害には、その時にその国の状況というのが本質から出たよ、しゃべって。」

これは、東北の地震。時に避難所を列を並べたよ。あの

特集エピソード 確かにと思った。

公共領域には様々なものがあり、複数の重なり合う公共領域の存在を意識的に認識し、可視化していくという点で人類学的な視点を持つことは災害(復興)時に不可欠だと感じた。特に被災地の仮設自治会のように被災者の代表として考える人々でも、被災者の総意であることはありえないため、声が届かない人々の声を聞く役割を果たす者として人類学者(者)の必要性を感じた。

災害復興の「目にみえないボランティア」などの「ボランティア」というものが、自ら参加したことも、調べたこともないため、どのように生計を立てているのか分からなかったが、被災地にはその土地に元々接点がない人々が第3者的な視点を持って関与していくことは必然である。また関与していった人々が復興後もその土地に居残ることは考えないのでは、と感じたため、ボランティアはどこまでやるのか、と答えがないような疑問を感じた。

災害の公共性

この文章と語りど考えたことは、災害のような難しい問題からの立ち回りと目指す場合には客観性が重要であることである。筆者がここで記述しているのは、復興

計画への消極的な関与と記録係に徹するという黒子のアプローチは、専門的な観点と全面に押し出さぬことにより話し合いと円滑に進めながら各々の意見を取り入れることが可能になり、効果的であるように感じた。(復讐か) したり、失われたものを再び取り戻そうとするときに、そこに立ち会う人の理想の形というものは個人で異なりあってもいいが、それと折衷することによって方向性の定まりが大きい前進になる。またその意見に対し、集団で責任を担うようになることもあって有効であるように感じた。

11 災害の公共性

3.11 東日本大震災は日本および世界中の人びとにとって大きなショックと共に、価値観の再定義を迫るものであった。災害を復興する上で、政府や地方自治体はどのように動いたのだろうか。文中に、ハリケーンカトリナの災害復興における無茶苦茶な例があるが、実は、東日本大震災復興の裏で、既得権益に都合の良い構造に造り替えようということ外起しているのかもしれない。たとえばTPPだったり改憲、災害によって公共性が揺らぐだけでなく、その後のケアや仕組みの再構築など、人為的なものが災害などのカーテンにおいて、公共性を揺さぶっているのではないかと感じた。

災害の公共性

- p.179- ここにある記念碑をめぐる「可視化」と「不可視化」の問題は、公共領域や公共性についての問題と深く結びついていると感じた。復興というのはとても地道な作業で、これだけ進んでいる、といった明確な指標もゴールもない。その中で目に見えるかたちでの成果をのぞくのは組織として当然、Tと言えり。そしてその成果をより多くの人に見せたいという発想もごく自然なものだろう。ただ、公共人類学においては、そのような、ある種派手で目立つ活動の裏で見えなくなっている、より地味なボランティアの活動にも目を向けることと忘れてはならないという点に気がされた。しかもそのどちらかが白、あるいは善、どちらかが黒、あるいは悪としてではなく、フラットに、そして細細に照らし出すなければならぬ異質性をおぼせもつ。そしてこのことこそが災害における人類学の役割のひとつであると思う。

文化人類学が公共とかかわることの難しさというのは 色々な本を読んだり
するなかで、感じてはいたけれど、今回の章を読む内で、その難しさをより感じた
というも、災害に対応するコミュニティはそれぞれ違ふし、役立つという視点で見ると
他の文野より フラウツェルに役立たないし、逆に介入することで、事態が
悪くなってしうこともあるからだ..

災害の復興というのはそのコミュニティの問題であるけれど、
行政はもちろ人 災害には他の地域からの注目もあつまりやすいので、
ボランティアなど、他のコミュニティもかかわることになる。

けれど、文中で行政とのギャップが述べられていたようにお互いの
認識にギャップが生じてしまうこともある。

行政のみならず、他地域、国とのギャップが生じないためには
どうしたら良いのかなと思った。

災害の復興というのはそのコミュニティベースで行われるし、

当事者の意見が中心になるべきだと思うけれど、時には外がもの
人のほうが、長いスパンでものを見る事が出来るので、あるていどの
意見の交流は必要だと思うけれど、その交流はどのようになされる
べきなのかと思った。

私は記念碑と津波の石碑の話を聞いたときに、自分がもし
その二つを見たときに、何も知らずに、目に見えないポラニヤの
ことまでも考えることは出来なかつたろうなと思ひ、ハッとさせられた。
私はこれから人類学について学びたいと考えているが、「人類学
が扱うのは現場における複雑な関係性や差異の繊細さを
できる限り損わずに照らしたす、ニュアンスある明るめた」という表現
をまた完璧に理解することができなかつたので、これからの勉強が
わかることが出来るようにしたい。

3.11の地震の映像は当時から数えきれないほど見ていたし、
自分とは遠い土地の出来事だと考えてしまっていた。しかし、今日
久しぶりに映像を見ると、映像を見えられないほどに、こんなに
恐ろしいもの、こんなにこわいものだったんだと心臓が痛みました。

11章 「災害の公共性」

この章で扱われている「災害」においては、様々な公共性の中で、「ボランティア」としての関わりが重要となる問題であると思う。東北の地震でも、九州の地震でも、災害後、多くの人々がボランティアとして現地へ赴き、現地の人々と関わり合っている。このように、災害の問題は、私たち自身が当事者の方々の声を聞き、「何が出来るのか」ということを考えることができ、また、そうすることによって、大きな力となるのではないかと思う。

災害の公共性

私は昨年の秋から数回、岩手県の沿岸部に被災地
ボランティアとして足を向けた。そこで度々感じたことは、
木村が文章の中で指摘する「行政が見えない被災地の部分」
があり、そのよりな部分を^{しつらに}市民にまでボランティアが可視化
していく必要がある、ということであった。震災に於いて仮設
住宅や復興住宅、内陸避難といった形で住む場所が
ばらばらになり、かつその人々を支えていた集落、ムラ単位の
コミュニティーが失われつつある今、防災の観点から、
現地住民の観点から、新たなコミュニティーの形成が
復興への手がかりになるのだが、そのためには長期的な
現地の調査、記憶の蓄積といった複雑な手段を踏む
ことになるだろう。その中で公共人類学は、「見えない部分」を
可視化するという点において、その真価を発揮できるのではないか
思う。